



## 「第5回 有東木夢プロジェクト会議」を開催～12月24日(火)～

本会議は、有東木地区で砂防事業を進めるにあたり、環境・歴史・文化の保全、地場産業を活かした地域づくりに反映させるため、地元住民の方々と夢を語り合う場として開催しています。

前回までに提案された「夢」を実現するため、今回は、25名の方々が参加し、国・市・住民それぞれの分担を確認するとともに、今後のスケジュールを報告しました。住民からは、観光の拠点となるような堰堤を、現道の通行に支障がでないよう道路拡幅や待避所を、残土を利用した放棄地の整地を等の意見を頂きました。



## 『崩れ』の作者「幸田文」展に行ってきました



大谷崩に向かう道路の終点右側に、幸田文の文学碑があるのをご存知でしょうか。安倍川直轄砂防60周年を記念し平成9年に建立されました。

昭和51年5月に大谷崩を訪れた幸田文は、「あの山肌からきた愁いと淋しさは、忘れようとして忘れられず、あの石の河原に細く流れる流水のかなしさは、思い捨てようとして捨てきれず・・・」と、文の代表作『崩れ』の冒頭で大谷崩と安倍川の荒廃山河の姿に心うたれた様子を記しています。また、帰宅後、逢う人ごとにショックを受けた大谷崩の話をつたえたが、作家の文をしてもその荒廃山河の様子を伝えきれず、その後の人様の背中を拝借してまでの見てある記『崩れ』につながったといえます。

「崩れ」に注目した唯一の作家の初の展覧会『会って見たかった。「幸田文」展』が開催されると聞いて、12月1日、早々出かけました。そこは閑静な住宅街にある東京世田谷文学館、着物を召したご婦人が目立ち、昭和の香りがしました。幸田文は、父で明治の文豪・幸田露伴を40代で看取ると作家デビューし、一躍流行作家となりました。数ある展示の中で、見学者の流れが滞っていたのは、72歳で「大谷崩」に出会ったのをきっかけに全国の崩壊地を行脚し執筆した『崩れ』の一角で、特に富士山大沢崩れの動画 ([http://www.cbr.mlit.go.jp/fujisabo/vtr/fujisabo\\_movie04.html](http://www.cbr.mlit.go.jp/fujisabo/vtr/fujisabo_movie04.html)) や、背負われてでも視察した富山県蘆山崩れなどでした。「幸田文」展を見て、また、娘の青木玉さんにお会いして、文がなぜ「崩れ」なるものに感銘を受け、あの年齢で現地を見てある記したかが自分なりに分かったような気がしました。

『崩れ』の最終章にはこんな一節があります。「植物は強い。人間はもっと強い。植物が年々に産む子種は、何千何万だし、人には知恵がある。そう簡単に死絶える植物ではないし、人がただ無為無策に枯れ山を眺めている筈もない。一時の荒廃はまぬがれないとしても、大丈夫、緑はとり返せる」と。私もこの「人」の一人として「緑をとり返すよう」努力したいと思いました。



昭和54年12月、自宅庭にて  
(撮影:片岡露満)

### 幸田家の人々

父: 幸田露伴 (1867～1947)  
: 幸田 文 (1904～1990)  
娘: 青木 玉 (1929～)  
孫: 青木奈緒 (1963～)



「幸田文」展が開催された世田谷文学館

崩壊は憚ることなく  
その陽その風のもとに、  
皮のおけ崩れた肌をさらして、  
凝然と、  
こちら向きに静まっていた。  
無惨であり、  
近づきたい畏怖があり、  
しかもいうにいわれぬ  
悲愁感が沈澱していた。



碑文



大谷崩の幸田文文学碑

## 「安倍川総合土砂管理講演会」を開催～12月21日(土)～

これまでの土砂管理は、上流域での土砂災害対策(砂防事業)、中下流域での治水対策(河川事業)、海岸域での海岸侵食対策(海岸事業)と、各領域で一定の成果をあげてきました。しかしながら、これらの対策は対処療法的であり、流砂系における土砂の流れは人体の血流と同じで、滞っても流れすぎても好ましくなく、土砂の連続性のため、各領域の連携が必要となります。

そこで、今年7月に安倍川総合土砂管理計画を全国に先駆けて策定しましたが、策定にあたりご尽力された中央大学の福岡教授、静岡大学の土屋教授、東京大学の佐藤教授らによる「安倍川流砂系における総合土砂管理に関する講演会」を静岡駅ビルで開催しました。先生方からは、大谷崩一ノ沢での土石流観測結果、中央構造線等を有し地質の脆弱な中部地方の比流砂量の多さ(土砂生産量の多さ)、三保松原まで堆積が伝播するのは2040年頃等の興味深い講演がありました。また、当日は席がなくなるほどの大盛況で、安倍川の土砂管理に対する関心の高さを痛感しました。



講演者



約150名の地域の方々が熱心に聴講

## 「工事だより」平成25年度 安倍川水系大ザレ溪流保全工事

【施工者:日鋪建設(株)、現場代理人:大橋 裕之、工期:平成25年5月24日～平成26年3月28日】

本工事箇所は、安倍川上流部(河口から43.7km)の本流、コンヤ橋と吊り橋の間に位置し、河床勾配は1/20と非常に急峻な溪流です。既設護岸は損傷が著しく、また河床低下によってコンヤ橋の橋台下部が洗掘し(右写真参照)、そのまま放置すれば落橋の恐れもありました。このため護岸や床固め等の大規模補修により、落橋防止と河岸の安定を図る工事を行っています。

工事に着手すると、吊り橋上流左岸において今にも崩落しそうな露出岩が発見され(下写真参照)、工事中の安全を考慮してNRC工法(New Rock Cracker: 非火薬岩盤破碎システム)にて発破し撤去しました。

また、簡易重量計(右下写真2枚参照)を用いて全車両の重量を計測し、過積載防止にも努めています。

工事は年度末までかかりますので、地域の皆様にはご迷惑をおかけしますが、ご協力をお願いいたします。



コンヤ橋の橋台下部洗掘状況



簡易重量計の重量計測状況



過積載防止のための簡易重量計



完成イメージと工事概要



崩落が懸念された露出岩(作業現場より上方を望む)

## 編集後記

先日、大河内堰堤の現場で「岩崖の住人」ニホンカモシカに遭遇しました。人に危害を与える動物ではなく、いつまでもジッとこちらを見ていました。大谷崩でも見かけることがあります。自然豊かな大河内・梅ヶ島地区で、特別天然記念物「ニホンカモシカ」と共存できることを嬉しく思いました。

最近、「国交省は変わったよ」、「出張所通信、見てるよ」と地元の方から声を掛けられることがあります。「本通信を続けていて良かったなあ」と思うことしきりです。本号が今年の最終号となりますが、大変お世話になりました。



大河内堰堤でニホンカモシカに遭遇(12/25)

引き続き、皆様からの情報やご意見を募集しますので以下までお願い致します。

Tel: 054-269-2003 、 E-mail: [http://www.cbr.mlit.go.jp/shizukawa/05\\_jigyuu/02\\_office/toiawase.html](http://www.cbr.mlit.go.jp/shizukawa/05_jigyuu/02_office/toiawase.html)

